

戦前史の真相

孫崎享
鈴木邦男

いま語らねばならない



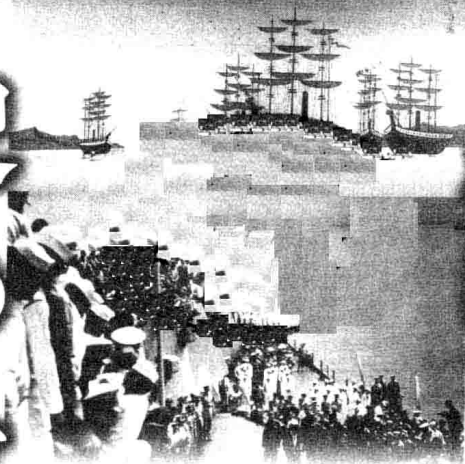
現代書館

いま語らねばならない

孫崎享

鈴木邦男

戦前史の真相



孫崎 享(まことき うける)

一九四三年、旧満州国鞍山生まれ。六六年、東京大学法学部中退、外務省入省。英国、ソ連、米国(ハーバード大学国際問題研究所研究員)、イラク、カナダ勤務を経て、駐ウズベキスタン大使、国際情報局長、駐イラン大使を経て、二〇〇二―〇九年まで防衛大学校教授。著書に『戦後史の正体』(創元社)、『小説外務省』(現代書館)等、多数。

鈴木邦男(すずき くにお)

一九四三年、福島県生まれ。六七年、早稲田大学政治経済学部卒業。全国学生自治体連絡協議会初代委員長を務める。卒業後、七〇―七四年、産経新聞社勤務。「楯の会」事件を契機に七二年、新右翼団体「一水会」を結成。九九年まで代表を務め、現在、顧問。著書に『愛国者は信用できるか』(講談社現代新書)、『右翼は言論の敵か』(ちくま新書)、『ヤマトタケル』(現代書館)等、多数。

いま語らねばならない 戦前史の真相

二〇一四年十月三十一日 第一版第一刷発行

著者 孫崎 享・鈴木邦男

発行者 菊地泰博

発行所 株式会社現代書館

東京都千代田区飯田橋三二―五

郵便番号 102-0007

電話 03(3222)1321

FAX 03(3222)5906

振替 001203183725

組版 デザイン・編集室エディット

印刷所 平河工業社(本文)

東光印刷所(カバー)

製本所 越後堂製本

装幀 箕浦卓

校正協力／岩田純子

©2014 MAGOSAKI Ukeru / SUZUKI Kunio Printed in Japan

ISBN978-4-7684-5747-4

定価はカバーに表示してあります。乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

<http://www.gendaishokan.co.jp/>

本書の一部あるいは全部を無断で利用(コピー等)することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。但し、視覚障害その他の理由で活字のままでこの本を利用出来ない人のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「点字図書」「拡大写本」の製作を認めます。その際は事前に当社までご連絡下さい。また、活字で利用できない方でテキストデータをご希望の方はご住所・お名前・お電話番号をご明記の上、左下の請求券を当社までお送り下さい。

活字で利用できない方のための
テキストデータ請求券
『いま語らねばならない
戦前史の真相』

いま語らねばならない 戦前史の真相*目次

序 章 同じ年に生まれて——これからの日本の課題とは？ 9

第二次世界大戦を省みる／格差社会の怖さ／「いま」を見る背景となった経験／
新たな戦争をしないために

第一章 明治維新再考 29

攘夷派をどう評価するか／攘夷派の存在感／明治以前の異文化との付き合い方／
開国の意識／西郷隆盛と右翼／脱亜入欧と憲法制定／
近代日本の転換点となった日露戦争／マスコミの勃興と世論

第二章 大正・一等国の隘路と煩悶 75

第一次大戦と中国進出／石橋湛山の「小日本」／現代の石橋湛山は？／
外交官の育て方／外交問題を解決する視点／パリ講和会議／権益争奪戦に加わった日本／
右翼と左翼／対外拡張主義と右翼／テロリズム／関東大震災と治安維持法／
大正時代と現代の相似

第三章 対米開戦の日本人——勝算なき大戦の教訓とは？

誰が戦争に向かったのか？／圧力に弱い日本人／A B C D包囲網とは何だったか？／
国際情勢を分析する力の欠如／アメリカに対する「誤解」／
大きな流れは異論を排除する／ゾルゲ事件と開戦／
ドイツに偏っていた外交／どこで引き返せなくなったのか？／戦略という視点の欠如／
アメリカの謀略／真珠湾攻撃を奇襲としたアメリカの真意／
宣戦布告はなぜ遅れたのか？／ミッドウエー海戦／引き返せない日本

第四章 戦前史から何を学ぶべきか

情報と外交／メディアの役割／民主主義とポピュリズム／民主主義の土壌／
天皇制と憲法改定／特定秘密保護法と治安維持法／
政府与党の中でも発言できない異常さ／警察のやり方／特定秘密保護法の時代錯誤／
領土問題と在日米軍／交渉のパイプがない現在／アメリカと東アジア／
領土問題に対する冷静な視点／対立を解決する視点／中国をどう見るか／
現実を直視する勇氣／目的と手段／愛国とは何か

おわりに 260

年表 263

あとがき／鈴木邦男 267

まえがき

孫崎 享

現在、日本は大きな曲がり角を迎えている。

それは漠然とした危機でない。国民一人ひとりの将来の生活に、根本的な変化を突き付ける。

3・11以後の原発問題がある。特定秘密保護法がある。集团的自衛権がある。TPP加盟交渉がある。消費税の値上げがある。

こうした、根本的变化を前にし、本来、国民的な熟議熟考が必要である。それがなされないまま、変わろうとしている。多分後世の人びとがこの時代を振り返れば、あの時代の人びとは何を考えていたのだろうか、少し考えれば間違った道に進んでいることは明々白々だとみられる道を何故歩んだかを問われるに違いない。

今回、鈴木邦男氏と対談をおこなうこととなった。

二人の歩んできた道はまったく異なる。

政治的スタンスも違う。

私は外務省にいて、ハト派と言われた。一九八五年外務省国際情報局の分析課長として勤務していたとき、上司は岡崎久彦氏であった。ある外務省員が岡崎局長に「貴方は孫崎課長を重用しているよ

うだがとんでもないことだ。貴方はタカ派の雄だ。その中にハトが隠れている」と讒言した。幸い岡崎局長は「ハトでもタカでもない。しっかりと国際情勢の必要な情報を咀嚼し、しっかりと分析するならば使う」といわれて私を追い出すことはなかった。

私は国際的秩序を確保する道は、平和的手段でお互いに如何に折り合いのつく妥協点を見出せるかにあるとみている。力の利用は、必ず崩れると思っている。

多くの人は、鈴木邦男氏は対極にいると見ている。

ウィキペディアの紹介を見てみよう。「日本の政治活動家、新右翼団体「一水会」最高顧問、プロレス評論家、予備校講師」「格闘家としては、合気道三段。富木流合気道から柔道にも進み、柔道三段」。多分正しい記述ではないと思うが、ウィキペディアは「一水会結成当初の鈴木^(マツ)の活動は、現在のような左右を越えた前向きな活動ではなく、暴力的な行動右翼そのものであった」と記載している。本来、私と鈴木邦男氏が共通の考え、共通の生き方を選択することはありえない。

しかし、この本を読んでいただければ、読者は二人の考え方で共通することのほうが、異なるよりもはるかに多いことに驚かれるに違いない。少なくとも私からすれば、かつて外務省で一緒に働いた同期の者や、先輩や、後輩たちとより、はるかに鈴木邦男氏と見解を一にする。

私はいま、いわゆる「ネトウヨ」の人びとから「国賊」というレッテルを貼られることもしばしばである。鈴木氏にとつて、私との対談は決して彼のプラスにならないのでないか。

では何故、二人に共通点が生まれたのであろうか。

それは安倍晋三政権の政策があまりに悪いからである。このままいけば、日本は壊滅的損害を被る。

それは政治信条がハトであれタカであれ、日本の国家のありうべき姿を考える者にはあまりに自明である。だから二人に共通項が生まれる。だから二人で語り合おうという思いが出る。

二人の語る話題は戦前の日本政治である。幕末開国から第二次大戦前までの期間である。しかし、これらは語り合う土俵である。二人ともここで新しい事実を提示するつもりはない。歴史という土俵の上で、各々の価値観、物の見方を紹介することが目的である。

時代が混乱しているとき、「歴史」は貴重な教訓を提供してくれる。

かつて日本には幾度も「激変の時代」があつた。明治維新と、昭和二十年の敗戦とその後の改革期がそれである。

二十一世紀の現在、閉塞的な社会状況に息苦しさを感じながらも、「出口」を探しあぐねている人は多い。だからこそ、私たちはいま幕末・明治維新、そして戦前史における成功と破綻の中から明日へのヒントを抽出する営為が必要になっているのである。

本書では、幕末の黒船来航から、第二次世界大戦終結のためミズーリ号での降伏文書調印までの時代を考察している。壮大なタイムスケールだが、この区分で日本を見ると、日本の近代化が対米意識の中で形成されたことが明らかにになる。

日本の近代化はすさまじい外圧のもとで、進行的な。対米自立を模索して、世界に拮抗するための努力を続けた戦前史と、対米従属に始終してしまう戦後日本のコントラストは、ときに嘆息を招くかも知れない。しかしだからこそ、過ちも多かった戦前史を知ることが、今後、対米従属から脱却を図る際に必須の経験知となる。その意味では、戦前史をいま知ることは、戦前の過ちを繰り返さない

ただでなく、これからの日本人の生き方を決めるための知的滋養になることは間違いない。

明治四年、維新間もない明治政府の主要メンバーが欧米使節に出立したが、彼らは欧米の国力の源泉である政治や商工業を学ぶ一方、訪問国の歴史も同時に深く学んでいる。近代化を急ぐ日本は、欧米に技術のみならず歴史も学んでいるのである。まだ幼かった明治政府が、徒手空拳で立ち向かった不平等条約改正、そして殖産興業という喫緊の課題に挑むため、あえて歴史を学んだ明治人の英知に敬意を表したい。なぜなら、その真摯な努力こそが日本を真の意味で開国させたからである。世界を理解するための努力を重ねた明治人の姿勢を、いまこそ私たちの共有財産にしなければならぬ。

いま、問題山積の日本で愛国的であるならば、その人は憂国的でもあるはずだ。近現代日本史の歩みを鈴木邦男氏とともに考察できたことを光栄に思う。

いま語らねばならない 戦前史の真相*目次

序 章 同じ年に生まれて——これからの日本の課題とは？ 9

第二次世界大戦を省みる／格差社会の怖さ／「いま」を見る背景となった経験／
新たな戦争をしないために

第一章 明治維新再考 29

攘夷派をどう評価するか／攘夷派の存在感／明治以前の異文化との付き合い方／
開国の意識／西郷隆盛と右翼／脱亜入欧と憲法制定／
近代日本の転換点となった日露戦争／マスコミの勃興と世論

第二章 大正・一等国の隘路と煩悶 75

第一次大戦と中国進出／石橋湛山の「小日本」／現代の石橋湛山は？／
外交官の育て方／外交問題を解決する視点／パリ講和会議／権益争奪戦に加わった日本／
右翼と左翼／対外拡張主義と右翼／テロリズム／関東大震災と治安維持法／
大正時代と現代の相似

第三章 対米開戦の日本人——勝算なき大戦の教訓とは？

117

誰が戦争に向かったのか？／圧力に弱い日本人／A B C D包囲網とは何だったか？／
国際情勢を分析する力の欠如／アメリカに対する「誤解」／
大きな流れは異論を排除する／ゾルゲ事件と開戦／
ドイツに偏っていた外交／どこで引き返せなくなったのか？／戦略という視点の欠如／
アメリカの謀略／真珠湾攻撃を奇襲としたアメリカの真意／
宣戦布告はなぜ遅れたのか？／ミッドウエー海戦／引き返せない日本

第四章 戦前史から何を学ぶべきか

167

情報と外交／メディアの役割／民主主義とポピュリズム／民主主義の土壌／
天皇制と憲法改定／特定秘密保護法と治安維持法／
政府与党の中でも発言できない異常さ／警察のやり方／特定秘密保護法の時代錯誤／
領土問題と在日米軍／交渉のパイプがない現在／アメリカと東アジア／
領土問題に対する冷静な視点／対立を解決する視点／中国をどう見るか／
現実を直視する勇気／目的と手段／愛国とは何か

おわりに

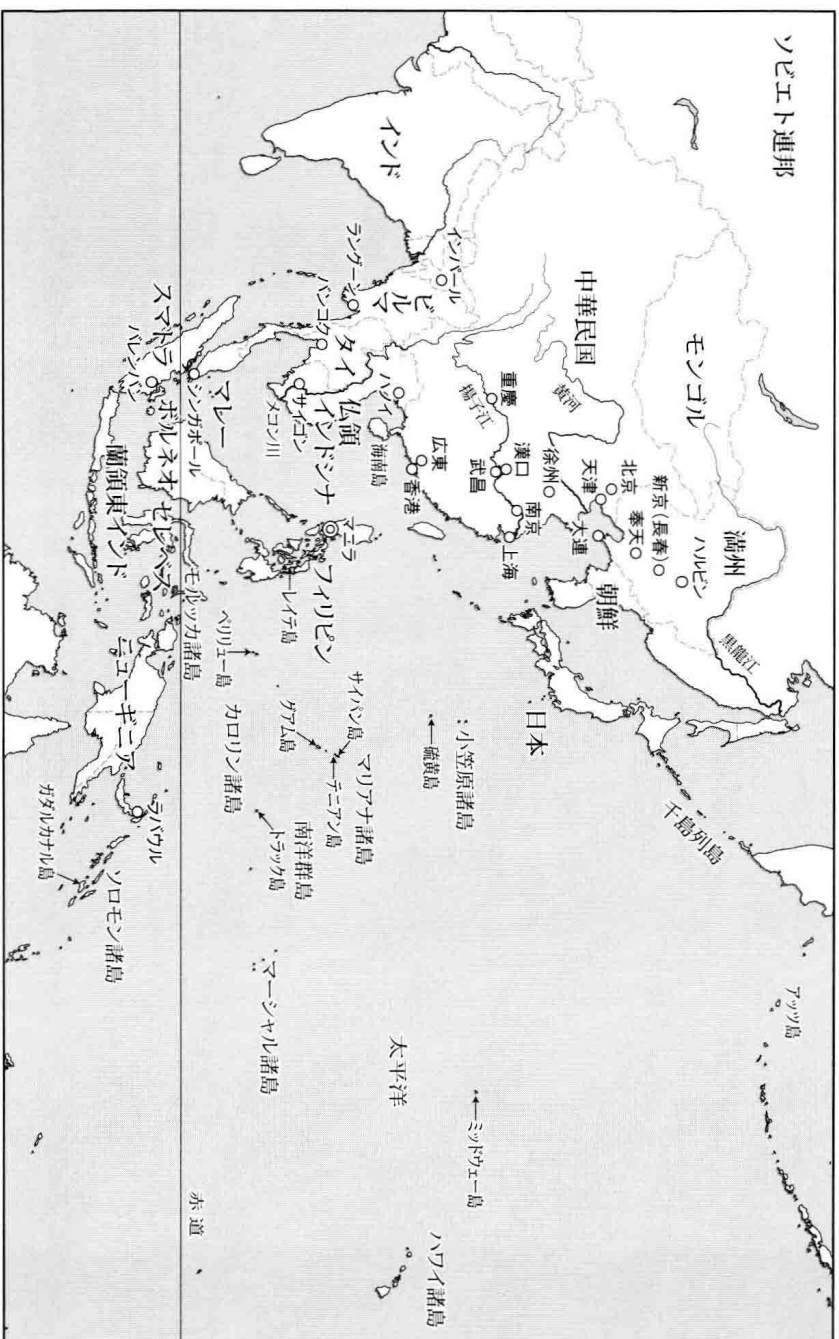
260

年表

263

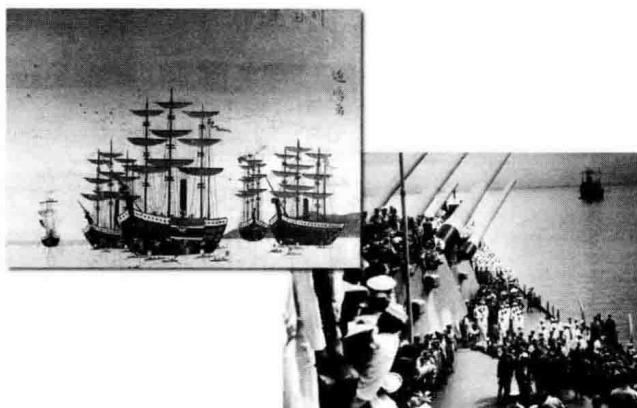
あとがき／鈴木邦男

267



序章

同じ年に生まれて
これからの日本の課題とは？



黒船／戦艦ミズーリ号

第二次世界大戦を省みる

鈴木 孫崎さんと僕は同じ一九四三（昭和十八）年生まれです。

孫崎 二歳で一九四五（昭和二十）年の終戦を迎えたので、一番苦しい時代を二歳から経験したことになります。子どもだったので、戦争のために困窮しているんだという理解はもちろんありませんでしたが、皆、非常に苦しい生活をしていると感じながら育ちました。私たちは後になって、その頃の苦しさが戦争と結びついていることを分かるようになりません。戦争がもたらす悲惨さというものを、われわれの世代も知っていると思います。

鈴木 僕は田原総一郎さん*から聞いた敗戦時の話が衝撃的でした。彼は敗戦時、小学校五年くらいだったそうです。昨日まで「日本は絶対に勝つ」と言っていた先生が、八月十五日を境に、急に「日本は民主主義の国になります」と言い出した。正反対のことを平気で言っている。それでも田原少年は、「先生なんか信じられない。大人なんか信じられない」と思ったそうです。

僕ももう少し前に生まれて、そういう敗戦時の状況を見てみたかった気がします（笑）。子どもたちはどう反発したのか？ 先生たちは謝っ

田原総一郎

（たはらそういちろう 一九三四～）ジャーナリスト・評論家。岩波映画社、東京12チャンネル（現・テレビ東京）を経てフリーに。『田原総一郎自選集』等著書多数。

たのか？ 実際にその場で見てみたかったですね。

孫崎 私たちより少し上の世代の人たちは、戦時中に純粋に反戦とかそういう気持ちでいることはできなかったでしょう。それだけ小さい頃から軍国教育を受けていては、反戦という考えを持つには大変な努力が必要だったでしょう。しかし、それでは日本はなぜ空前の大戦に突入してしまったのか？ 本書のテーマがまさにこれですが、これはいまでも重要なテーマで、解明されていない問題も議論が尽くされていない点もたくさん残っていますね。

伊丹万作^{*}さんが戦後に書いた「戦争責任者の問題」（『映画春秋』一九四六年八月）で言うように、国民は何らかのかたちで戦争に加担していたわけです。一九四三年生まれで、戦後の教育を受けた私たちにはそういう過去がないから、純粋に戦争は悪いと思っただけです。これは、われわれの世代の特色だと思います。でも、国民学校に入っていた世代から上の人たちは、われわれのような純粋培養の平和主義者ではあり得ませんでしたね。

鈴木 日本がアメリカと戦争してから約七十年が経ちます。当時の日本はどうして世界のこととも知らないで戦争したのか？ 愚かな戦争だったと反省するのは必要だと思います。ところが、いまの若者たちは、七十年

伊丹万作

（いたみまんさく 一九〇〇～四六）映画監督・脚本家。「無法松の一生」や一九三七年公開のドイツとの合作国策映画「新しい土」等の監督作品で有名。著書に『伊丹万作エッセイ集』他多数。